



筑紫女学園大学リポジット

Jinabhadra' s Demonstration of the Existence of jīva : A Study of the First Chapter of Ganadharavāda (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 智行, UNO, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/562

ジナバドラのジーヴァ存在論証

—ガナダラヴァーダ第一章和訳研究(2)—

宇野智行

Jinabhadra's Demonstration of the Existence of *jīva* : A Study of the First Chapter of Gaṇadharavāda (2)

Tomoyuki UNO

序

本稿は、拙稿「ジナバドラのジーヴァ存在論証—ガナダラヴァーダ第一章和訳研究(1)—」(『ジャイナ教研究』第10号所収、宇野(智) [2004].) に続いて、白衣派聖典注釈者ジナバドラ・ガニ(Jinabhadra Gaṇi, 505-609 ca.) による『ヴィシェーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』(*Viśeṣāvaśyakabhāṣya*) のガナダラヴァーダ第1章およびジナバドラ自身の自注(*Svopajñavṛtti*) の和訳を提示するものである。ガナダラヴァーダには、バラモンであった11人のガナダラたちが祖師マハーヴィーラとの問答を通じてジャイナ教に帰依して出家する物語をモチーフとして、様々な哲学的議論が盛り込まれている。著者ジナバドラは、このガナダラ帰依を題材としつつ、様々な他学派との討論を盛り込んでおり、聖典注釈である『ヴィシェーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』の中で最も他宗教・他学派を意識したセクションを構成している。ガナダラヴァーダ第1章は、'Jivāstitvasiddhi'(もしくは'Jivasiddhi') と銘打たれており、ジーヴァの存在の是非を巡り主に唯物論者(Cārvāka / Lokāyata) との対論が記録されている。

なお本稿からは、ガナダラヴァーダとのパラレル文献と見られる『カルパストラ』の注釈文献群、ヘーマチャンドラ(1089-1172ca.) の『トリシャシュティ・シャラーカープルシャ・チャリタ』(*Triṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita*) 第10巻、グナチャンドラ著『マハーヴィーラ・チャリトラ』(*Mahāvīracaritra* : ヴィクラマ暦1139造)¹ などのマハーヴィーラ伝テキストも《パラレルテキスト》として提示することとした。また、上記のうち、ダルマサーガラによる『カルパストラ』に対する注釈『キラナーヴァリー』(*Kiraṇāvalī* : ヴィクラマ暦1628年造)² および著者不明の『カルパ・サマルタナ』(*Kalpasamarthana* : 13-17世紀)³、さらに『マハーヴィーラ・チャリトラ』には、ニルユクティ韻文およびバーシャ韻文がかなり引用されており、これらについては、該当する韻文箇所を示すこととした。

0.	導入	vv. 1987-1999
0.1	ガナダラの紹介	vv. 1987-1993 (v. 1991まで訳出済)
1.0.1	インドラブーティの慢心	vv. 1994-1999
1.0.2	インドラブーティとマハーヴィーラの邂逅	vv. 2000-2002

【ガナダラヴァーダ第1章和訳】

0. 導入

0.1 ガナダラの紹介（承前）

【VĀBh 1992 (Niryukti Gāthā 439)】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2016; VĀBh (e): 2012 (Niryukti 439); ĀN (a, d, e): 597; ĀN (f): 598; KSDhV: Niryukti 597, p.249; KSam: v.2, p.29)

【インドラプーティからスダルマンまでの】5人【のガナダラたち】には【それぞれ】500人の集団が、【マンディカプトラとマウルヤプトラの】2人【のガナダラたち】には【それぞれ】350人の集団が【弟子としてとりまいて】いる。【アカンピカとアチャラブラター、そしてメータアールヤとプラバーサの】2組【のガナダラたち】にはそれぞれ300人ずつの集団が【弟子としてとりまいて】いる。

pamcaṇhaṃ pamcasattā addhūṭṭhasatā ya honti donha gaṇā /
donhaṃ tu¹ juvalayāṇaṃ tisato tisato havati² gaccho //

[Skt.: pañcānāṃ pañcaśatāni ardhacaturthaśatau ca bhavato dvayor gaṇau /
dvayos tu yugalakayos trīśatas trīśato bhavati gacchaḥ //]

(1. KSam: ca 2. KSDhV: bhava)

【解説】

Cf. ĀHV on ĀN (a) 597, f.241 a-b: pañcānāṃ ādyānāṃ gaṇadharāṇāṃ pañca śatāni pratyekaṃ pratyekaṃ parivāra itī, tathā arddhaṃ caturthasya yeṣu tāni ardhacaturthāni śatāni ardhacaturthaśatāni mānaṃ yayoh tau ardhacaturthaśatau bhavataḥ dvayoh pratyekaṃ gaṇau, iha gaṇaḥ samudāya eva ucyate, na punar āgamika itī, tathā dvayos tu gaṇadharayugalayoh trīśataḥ trīśato bhavati gacchaḥ, etad uktaṃ bhavati --- uparitanānāṃ caturṇāṃ gaṇadharāṇāṃ pratyekaṃ trīśatamānaḥ parivāra itī gāthārthaḥ //; ĀNava on ĀN (e) 597, p.310: ardhacaturthaśatāni mānaṃ yayos tau ardhacaturthaśatau bhavato dvayoh pratyekaṃ gaṇau, iha gaṇaḥ samudāyaḥ /

それぞれのガナダラの弟子の数を列挙する韻文であるが、ここでは ‘gaṇa’ および ‘gaccha’ という語が「弟子の集団」を意味する語として使用されている。ジャイナ教においては、出家者の法統の最大の単位を意味して ‘gaṇa’ (「集団、軍団」の意) や ‘kula’ (「集団、血統」の意) という語が使用されてきた。「ガナダラ」(gaṇadhara) という語は、この出家者たちの最大単位である教団を支える者を意味し、一般に「教団長」と翻訳されることが多い。このような出家者集団を意味する二つの語は、次第に ‘gaccha’ (「行くこと、一緒に遊行すること」の意) にとって代わられるが、これら三語はほぼ同義で使用される。

当該箇所は、‘gaṇa’ ‘gaccha’ の二語が同義で使用されている例と言えるが、厳密に言えばこの二語を「教団」と訳することには難がある。すなわち、11人のガナダラたちはこの時点ではジャイナ教への帰依以前の段階であり、未だバラモンとして弟子を持っていたに過ぎない。ハリバドラやジュニャーナサーガラもこのことを意図して、‘gaṇa’ という語が単なる「集合」(samudāya) を意味することを示している。さらに、ハリバドラは ‘gaṇa’ という語が「アーガマに基づくもの」(āgamika) ではないと注釈しているが、これは救世主の説法に端を発するジャイナ教の弟子たちの集団ではないことを意図しているのであろう。つまり、「救世主の説法(アルタとしてのアー

ガマ) →ガナダラによるスートラの作成 (スートラとしてのアーガマ) →知を継承する場としての「教団」という形でアーガマは継承され、アーガマ保持を目的としてジャイナ教の「教団」が形成されていると考えられるのである (この点については、宇野 [2011] を参照されたい)。したがって、ここでは、「教団」とはせず、'gana'の原義を尊重し「集団」と訳した。'gana' 'gaccha' については、Wiley [2004: 87-88] を参照せよ。

【VĀBh 1993 (Niryukti Gāthā 440)】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2017 (Niryukti 147); VĀBh (e): 2013 (Niryukti 440); Cf. ĀN (a, f): Bhāṣya 115; ĀN (d): 542; ĀN (e): Bhāṣya 125)

バヴァナパティ、ヴァーナヴィアンタラ、ジュヨーティシャヴァーシン、ヴィマーナヴァーシンというあらゆる威徳を持ち、眷属を伴った [神々] は、[マハーヴィーラの独存] 知の生起に対して祝福を行った。

bhavanavati vānavantara jotisavāsī vimānavāsī ya /
savviddhiya saparisā kāśī nānuppatāmahimam //
[Skt.: bhavanapatir vānavyantarō jyotiṣavāsī vimānavāsī ca /
sarvarddhikāḥ sapariśado 'kāṛṣuḥ jñānotpātamahimām //]

【解説】

Cf. ĀHV on ĀN (a) Bhāṣya 115, f.230 a: bhavanapativyantarajyotirvāsino vimānavāsinaś ca sarvarddhyā hetubhūṭayā sapariśadaḥ kṛtavantaḥ jñānotpattimahimām iti gāthārthaḥ /; ĀMV on ĀN (d) 542, f.300 b: bhavanapativyantarajyotirvāsino vimānavāsinaś ca sapariśadaḥ sarvarddhyā jñānotpattimahimām akāṛṣuḥ kṛtavantaḥ /; ĀND on ĀN (f) Bhāṣya 115, f.108 b: bhavanapatyādayaḥ sapariśado jñānotpādamahimānam akāṛṣuḥ /

本韻文は、全ての ĀN の刊本においては、ガナダラヴァーダではなくサマヴァサラナ (<聖なる集会>)のセクションの直前に配置されている。すなわち、本来的には一つ『ニルユクティ』伝承の中では一この韻文は<聖なる集会>が行われる前に、神々によるジナに対する祝福があったことを示すものであった可能性が高い。ジナバドラはこの韻文を、リシャバ伝において一回 (VĀBh (a) : 1711 (Niryukti 272)), またマハーヴィーラ伝では当該韻文を含め二回 (VĀBh (a) : 1977, 1993 (Niryukti 440)) 繰り返しており、当該箇所以外ではまさにジナの開悟の祝福の意味を持つ。ジナバドラがガナダラヴァーダでこの韻文を再度繰り返したのは、次詩節 (VĀBh 1994) での「インドラプーティの嫉妬」につなげる必要があったことがその理由であると思われる。

なお、ジャイナ教において神 (deva) は主に 4 種に分類される。

Cf. SthA 257: cauvvihā devā pannattā, tamjahā -- bhavanavāsī vānamamtarā jotisiyā vimānavāsī //; TAASBh on TAAS 4.3: te ca devanikāyā yathāsaṅkhyam evamvikalpā bhavanti / tad yathā -- daśavikalpā bhavanavāsinaḥ asurādayo vakṣyante / aṣṭavikalpā vyantarāḥ kinnarādayaḥ / pañcavikalpā jyotiṣkāḥ sūryādayaḥ / dvādaśavikalpā vaimānikāḥ kalpopapannaparyantaḥ saudharmādiṣv api //.

上記の『タットヴァ経注』に見られるように、これら 4 つのタイプの神々はそれぞれ、10種、8種、5種、12種に細分される。詳しくは Sanghavi [1974: 152 ff.] を参照せよ。

'nānuppatāmahimam' という語の解釈については判然としない。ハリバドラは 'kṛtavantaḥ

jñānotpattimahimām’ (ĀHV on Bhāṣya 115, f.230 a.), マラヤギリは ‘jñānotpattimahimām akārṣuḥ kṛtavantaḥ’ (ĀMV on 542. f.300 b.), マーニキャシェーカラは ‘jñānotpādamahimānam akārṣuḥ’ (ĀND on Bhāṣya 115. f.108 b) と注釈するのみであり、語形・解釈共に明瞭ではない。なお、直接当該韻文を注釈するものではないが、アバヤデーヴァは ‘nānuppayamahimāsu’ という語を次のように解釈している。

SthAV on SthA 142, p.197: nānuppayamahimāsu kevalajñānotpāde devakṛtamahotsaveṣv iti / このアバヤデーヴァの言明では、‘mahimā’ (f) を ‘mahotsava’ (「祝祭, 祝福」) と言い換えており、また複合語の両分は位格関係にあることが示されている。よって「独存知の生起に対して神々が為した祝祭／祝福」と理解できよう。なお、次詩節 (VĀBh 1994) に現れる ‘mahimā’ に対して、マラヤギリは ‘mahimām pūjām devaiḥ kriyamānām’ と注釈しており、神々が主体となって「礼拝」(pūjā) や「祝祭／祝福」(mahotsava) が行われることが意図されている可能性が高い。ここでは、「祝福」と訳しておく。

0.1.1 インドラブーティの慢心

【VĀBh 1994 (Niryukti Gāthā 441)】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2018 (Niryukti 148); VĀBh (e): 2014 (Niryukti 441); ĀN (a, d, e): 598; ĀN (f): 599; KSDhV: Niryukti 598, p.249; KSam: v.5, p.29)

さて、ジナたちの最高の主 [であるマハーヴィーラ] が、神々によって祝福されているのを見て、[三界の中で我こそが知者であるという] 慢心を持ち、嫉妬したインドラブーティという [第1の学者] は [その<聖なる集会>に] やって来た。

daṭṭhūṇa¹ kiramāṇiṃ mahimam devehiṃ jīnavarindassa /
adha eti ahammāṇi amarisito indabhūti tti //

[Skt.: dṛṣtvā kriyamānām mahimām devair jīnavarendrasya /
atha eti ahammāṇi amarsīto indrabhūtir iti //]

(1. ĀN (a, d, e, f), KSDhV, KSam: soṅga)

【解説】

Cf. VĀBhVr on VĀBh (d) 2018: atrāntare kathañcit tato yajñapāṭān nirgatavāt, kim ata āha --- daṭṭhūṇetyādi, ‘dṛṣtvā’ samalokya ‘kriyamānām’ nirvarttyamānām ‘mahimām’ jñānotpādasamavasaraṇaracanālakṣaṇām, kaiḥ ‘devaiḥ’ vibudhaiḥ, kasya ‘jīnavarendrasya’ bhagavato vīrasya ‘athe’ty atrāntare ity uktam etat ‘eti’ āgacchati samavasaraṇam, yataḥ prathama upādhyāya ity abhiprāyaḥ /; ĀHV on ĀN (a) 598: śrutvā ca kriyamānām, dṛṣtvā vā pāṭhāntaram, mahimām devair jīnavarendrasya, athāsmiṃ prastāve ‘e’tti āgacchati bhagavatsamīpam ‘ahammāṇi’ tti aham eva vidvān iti māno ‘sya iti ahammāṇi, ‘amarsītaḥ’ amarsayuktaḥ, amarṣo matsaraviśeṣaḥ, mayi sati ko ‘nyaḥ sarvajñaḥ iti, apanayāmi adya sarvajñāvādam, ityādi saṅkalpakaluṣitāntarātmā, ko ‘sau ityāha --- indrabhūtiḥ, iti gāthārthaḥ //

本詩節よりコーティ・アーチャーラヤの『ヴィシェーシャーヴァシユヤカ・バーシャ・ヴリッティ』(Viśeṣāvaśyakabhāṣyavrtti) が開始される。彼は、「祝福」(mahimā) という語を注釈して「[マハーヴィーラの独存] 知の生起についての聖なる集会場 (samavasaraṇa) を設えること」(jñānotpādasamavasaraṇaracanā) と述べており、神々の祝福の具体的内容が集会場の設営であ

ることを示唆している。〈聖なる集会〉において、神々はまず雨、花、風によって場を浄めて、そこに三層構造からなる墨壁を造る。つまり、ここでの神々による祝福は、具体的に集会場を設置、準備することを意図しており、〈聖なる集会〉開催以前の祝福とは異なることに注意しなければならない。インドラブーティは既に開催された〈聖なる集会〉を見聞し、神による祝福に対して妬心を起こしたのである。なお、〈聖なる集会〉における集会場の構造や神々の役割などについては、矢島 [1993: 71 ff.], Balbir [1994: 82 ff.] を参照されたい。

ĀN の刊本ではすべて 'soūna' (Skt.: śrutvā) という読みである。すなわち、「ジナたちの最高の主 [であるマハーヴィーラ] が、神々に祝福されているのを聞いて」と翻訳可能である。

【VĀBh 1995】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2019; VĀBh (e): 2015; ĀN (d): Bhāṣya 120; ĀN (e): Bhāṣya 1; KSDhV: Bhāṣya 120, p.249; KSam: v.6, p.29)

インドラブーティ：

「この [町の] 人々は どうして私を捨てて彼 [マハーヴィーラ] の足下へ赴くのか？ [一切知者である] 私が居るにも関わらず、別の者までもが [何でも] 知っているということが、どうして起こりえようか？」

mottūna mamaṃ logo kiṃ dhāvati¹ esa tassa pāmūle /

aṅṅo vi jānāti mae tṭhitammi kattocayam etam //

[Skt.: muktivā māṃ lokaḥ kiṃ dhāvati eṣa tasya pādāmūlam /

anyo 'pi jānāti mayi sthite kutastyam etad //]

(1. ĀN (d, e), KSDhV: vaccai)

【解説】

Cf. VĀBhVṛ on VĀBh (d) 2019: māṃ muktivā kim eṣa nāgaralokas tasya kasyacit pādāmūlam dhāvati, nanu mahatkutūhalaṃ, kathayatātra nibandhanam iti, kiṃ brūta sarvajña 'sāv iti, ā maivaṃ bhūyo 'pi vakṣyatha, yato 'nyo 'pi jānāti, sarvam iti prakramād gamyate, 'mayi sthite' mayi prāṇān dhārayati sati, kutastyam etad, asambaddham etat /; ĀMV on ĀN (d) Bhāṣya 120, f.313 a: māṃ sakalāśāstrapāraḡaṃ muktivā kim eṣa lokas tasya pādāmūlam vṛajati, na cāsau madapekṣayā kim api jānāti, tathā hi --- mayi prativādini sthite 'nyo 'pi kim api jānātīti kautastyam etat, na caitat sambhavitīti bhāvaḥ / (あらゆる聖典に通じた私を捨てて、この [町の] 人々は どうして彼の足下へ赴くのか。しかし、彼は私に比べるなら何も知らないではないか。すなわち— [一切知者である] 私が対論者として居るにも関わらず、別の者までもが何でも知っているということが どうして起こりえようか。決してこのようなことは起こりえない、ということである。)

上記のように、インドラブーティは自身を一切知者と捉え、自分以外に一切知者が居るということに腹立ちを覚える。コーティ・アーチャルヤは「私が息をしている限り」(mayi prāṇān dhārayati sati)と注釈しており、この世にインドラブーティ以外に一切知者が居ないことを強調している。

《パラレルテキスト》

KSVV on KS 121, p.335: aho mayi sarvajña saty api aparo 'pi sarvajñaṃ svam khyāpayati, duḥśra-vaṃ etat karṇakaṭu / (ああ何ということか。一切知者である私が居るにも関わらず、別の者までもが自らを一切知者であると言いつらしている。これは耳障りで聞くに堪えない。) ; KK, p.141:

mayi sarvajñe vidyamāne 'nyaḥ ko 'pi sarvajñatvaṃ khyāpayati tat katham kṣameyam /

【VĀBh 1996】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2020; VĀBh (e): 2016; ĀN (d): Bhāṣya 121; ĀN (e): Bhāṣya 2; KSDhV: Bhāṣya 121, p.249; KSam: v.7, p.29)

インドラプーティ :

「あるいは、愚かな人々が[彼の下へ]赴いているのであろう。[しかし、] 神々は[マハーヴィーラが] 一切知者であると考えて、[彼に] 敬礼し賞賛しているけれども、一体どうしてこ[のマハーヴィーラ] に驚嘆しているのであろうか？」

dhāvejja¹ va mukkhajāṇo devā kidha ñeṇa vimhayam ñitā /
vandanti samthūṇamti ya jeṇam savvaṇṇubuddhīe //1996//

[Skt.: dhāveta vā mūrkhajāṇo devāḥ katham anena vismayam ñitāḥ /
vandante samstuvanti ca yena sarvajñabuddhyā //]

(1. ĀN (d, e), KSam: vaccijja; KSDhV: vaṃcijja)

【解説】

Cf. VĀBhVr on VĀBh (d) 2020: dhāveta cāyam janas tatpādāntike mūrkhātvaḥ gatānugatikatvāt, na hi lokapravāho hitam ahitam vorarīkṛtya pravarttate (またこの人間は彼の足下に赴くであろう。愚か者なので、既に起こった事に追隨するものであるから。実に、世の流行に乗る者は、有益か無益かを承認した上で行動するわけではないのである。) ; ĀMV on ĀN (d) Bhāṣya 121, f.313 a: vrajed vā tatpādāmūlam mūrkhajāṇo, mūrkhataḥ yā yuktāyuktavivekavikalatvāt, devās tu katham anena vismayam ñitāḥ, yena vismayanayanena sarvajñabuddhyā taṃ vandante samstuvanti ca /.

コーティ・アーチャールヤが言うように、人々がマハーヴィーラの元へ向かう原因は「愚か者」(mūrkhā) であることに他ならない。下記に示したように、あらゆるパラレルテキストにおいては、このことを示すために様々な比喩が用いられている。これらの比喩では「良いものを捨て悪いものに向かう」ことが示され、それは大衆の愚かさが原因であると考えられている。また、愚かさのないはずの神々については、マハーヴィーラによって騙されているとする。

《パラレルテキスト》

KSDhV, vv.6-7, p.249: aho surā katham bhrāntāḥ tīrthāmbha iva vāyasāḥ / kamalākaravad bhekā makṣikāḥ candanam yathā // karabhā iva sadvṛkṣāt kṣīrāṇnam śūkarā iva / arkasyālokavad ghūkāḥ tyaktvā yāgam prayānti yat // (ああ、なぜ神々は惑わされたのか。川岸の水を[捨ててドブ水を好む] カラスども、蓮池を[捨てる] カエルども、白檀を[捨てて悪臭を好む] ハエども、良木を[捨てて刺のある木を好む] ラクダども、ミルク粥を[捨てて糞尿を好む] ブタども、太陽の光を[捨てて闇を好む] フクロウどものように、愚か者どもは供犠を捨てて[彼の元へ]行くのだ。) ;

KSVV on KS 121, pp.335-336: katham nāma śrūyate, kiñ ca kadācit ko 'pi mūrkhāḥ kenacid dhūrtena vañcyate, anena tu surāṃ api vañcitāḥ, yad evaṃ yajñamaṇḍapaṃ māṃ sarvajñam ca vihāya tatsamīpaṃ gacchanti // aho surāḥ katham bhrāntās tīrthāmbha iva vāyasāḥ / kamalākara-vadbhekā makṣikāś candanam yathā // karabhā iva sadvṛkṣān kṣīrāṇnam śūkarā iva / arkasyālokavad ghūkās tyaktvā yāgam prayānti yat // (一体どうして[こんなことを] 聞かされるのか。いや、たまたま誰か愚か者があるベテン師に騙されているのだ。一方で、神々もこやつに騙された

のだ。そうして祭儀場と一切知者である私を離れて、彼の元へ行くのである。以下上記 KSDhV に同じ。) ; KK, p.141: tathā indrajālikena dhūrttena mūrkhhaloko vañcyate, anena tu devā pi vañcitāḥ, yato mām sarvajñam yajñam ca muktavā tatpārśve yānti / (さらに、ペテン師の悪者に愚か者どもは騙されている。一方で神々もまたこやつに騙されている。というのも、一切知者である私と祭儀を捨てて、彼の方へ赴くのだから。) ; TSPC 10.5.67-69: mām tyaktvā kim amī yānti pākhaṇḍinam amuṃ janāḥ / tyaktvā cūtam ivāvijñāḥ karīram marumānuṣāḥ // mamāpi purato 'trāsti sarvajña iti ko 'pi kim / pañcānanasya na hy agre bhavaty anyāḥ parākramī // manuṣyā yady amī mūrkhā yānty enaṃ yāntu tan nanu / devāḥ katham amī yānti dambhaḥ ko 'py asya tan mahān // (あの者たちはどうして私の元を離れて、あの異端の者の元へ赴くのか？砂漠に居る愚か者たちが、マンガーの樹を離れてカリーラ樹(砂漠に生える刺のある樹)の元に[赴く]ように。この私の目の前でも、誰か「[私は]一切知者である」と言えるような者がいようか？というのも、ライオンの目の前では誰も勇敢では居られないであろうから。あの愚かな人々が彼の元へ行くなれば、まさに行くがよい。しかしどうしてあの神々は[彼の元へ]行くのだろうか？こやつには、何かとてつもないまやかし(dambha)があるのだ。)

【VĀBh 1997】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2021; VĀBh (e): 2017; ĀN (d): Bhāṣya 122; ĀN (e): Bhāṣya 3; KSDhV: Bhāṣya 122, p.249; KSAm: v.1, pp.29-30; MVC: v.4, f.254 a)

インドラプーティ :

「いやむしろ、かの者[マハーヴィーラ]が[愚かな]知者であるように、その神々もまた全く同様なのである。愚かな村人と役者の間には、似つかわしい結びつきがあるのだ。」

adhavā¹ jārisao cciya so² jñānī tārisā surā te vi /

aṇusariso saṃjogo gāmaṇaḍāṇam ca³ mukkhāṇam //

[Skt.: athavā yādṛśa eva so jñānī tādrśā surās te 'pi /

anusadrśaḥ saṃyogo grāmaṇaṭayor ca mūrkhayoḥ //]

(1. KSAm: ahavā [puna] 2. MVC: so savvaṇṇū 3. VĀBh (d, e), ĀN (d, e), KSAm, MVC: va)

【解説】

Cf. ĀMV on ĀN (d) Bhāṣya 122, f.313 a: atha vā yādṛśa eva sa jñānī te 'pi surās tādrśa eva, mūrkhā ity arthaḥ, tato 'nusadrśaṃ anurūpaḥ saṃyogas tasya jñāninaḥ eteṣāṃ ca devānāṃ, kayor ivety āha --- grāmaṇaṭayor iva mūrkhayoḥ, yathā grāmo mūrkhō naṭo 'pi ca tathāvidhavidyāvikalatvāt mūrkhā iti parasparaṃ tayor saṃyogo 'nurūpaḥ, evam eṣo 'pīti //.

VĀBh (a)以外の殆どの刊本では、d 句の 'ca' を 'va' と読む。すなわち、以下のように翻訳出来よう。「例えば、愚かな大衆と役者が似つかわしい結びつきを持つように (iva).」

当該詩節では、インドラプーティの慢心がさらに進んでいることが記されている。すなわち、神々はマハーヴィーラに騙されていただけという考えから、神々もマハーヴィーラも両者ともに「愚か」(mūrkhā)であるという考えに至っている。愚か者同士である両者が必然的に結びつく、と考えるのである。

《パラレルテキスト》

KSVV on KS 121, p.336: atha vā yādṛśo 'yaṃ sarvajñas tādrśā evaite, anurūpa eva saṃyogaḥ /; KK,

p.141: yādrśo 'pi sa sarvajñas tādrśā eva devatāḥ / samyogo hy anurūpo 'yam grāmiṇanaṭadurdhi-
yām // tathāpy etasya saravajñatvam ahaṃ na sehe, yathā --- vyomni sūryadvayam kiṃ syāt gu-
hāyām kesaridvayam / pratyāhāre ca khadgau dvau kiṃ sarvajñau sa cāpy ahaṃ // (この一切知者
は神々と全く同じなのだ。 というのも愚かな村人と役者には似つかわしい結びつきがあるのだから。
しかしながら、こやつが一切知者であることに私は耐えられぬ。たとえば、空に太陽が二つあ
ろうか？洞窟にライオンが二匹いようか？また、一つの鞘に二振りの太刀が入ろうか？私と彼の二
人が共に一切知者であろうか？[そのようなことはあり得ない。]； TŚPC 10.5.70: yādrśo vaiśa sar-
vajño devā api hi tādrśāḥ / yadi vā yādrśo yakṣo jāyate tādrśo baliḥ //

【VĀBh 1998】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2022; VĀBh (e): 2018; ĀN (d): Bhāṣya 123; ĀN (e): Bhāṣya 4; KSDhV:
Bhāṣya 123, p.252; KSam: v.41, p.31; MVC: v.6, f.254 a)

インドラブーティ：

「神々とアスラたちの目の前で[彼らの]熱を冷ました上で、直ちに彼[マハーヴィーラ]
が一切知者であるという説を余すところなく撲滅してやろう。」

kātum hatappatāvam purato devāṇa dānavāṇam ca /

nāse haṃ niśesaṃ kṣaṇeṇa savvaṇṇuvātam se //1

[Skt.: kartum hatapatāpam purato devānām dānavāṇam ca /

nāśayāmi ahaṃ niḥśeṣaṃ kṣaṇeṇa sarvajñavādam tasya //]

(VĀBh (d, e): vāṇa vivihatthāṇa lahu jānavemi maṃ gaṃtum)

【解説】

Cf. ĀMV on ĀN (d) Bhāṣya 123, f.313 b: devānām dānavāṇām ca purataḥ agre tathāvidhapaśna-
jālair hatapatāpam kṛtvā kṣaṇeṇa kṣaṇamātreṇa 'se' tasya sarvajñavādam niḥśeṣam ahaṃ
nāśayāmi /.

テキストに示したように、コーティ・アーチャールヤ系刊本における cd 句は底本と全く一致し
ない。編者である Ānandasāgara と Tatia はこの韻文後半部をカッコ付きで補っているが、コー
ティ・アーチャールヤの注釈では「素直な意図 (rjvabhiprāya)」と述べられるのみであり、この
補完の根拠は不明である。この異読に従えば、次のように翻訳されよう。

「神々とアスラたちの目の前で[彼らの]熱を冷ました上で、[マハーヴィーラの元へ]行っ
て、速やかに (lahu/*laghu) 様々な物事についての (vivihatthāṇa/*vividhārthānām) 討論
によって (vāṇa/*vādena) 私のことを知らしめてやろう (jānavemi/*jñāpayāmi).」

《パラレルテキスト》

TŚPC 10.5.71: asya sarvajñatādarpaṃ asāv apaharāmy ahaṃ / devānām mānavāṇām ca paśyatām
eva saṃprati //

【VĀBh 1999】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2023; VĀBh (e): 2019; ĀN (d): Bhāṣya 124; ĀN (e): Bhāṣya 5; KSDhV:
Bhāṣya 24 (sic: 124), p.252)

以上のように述べた後、彼[インドラブーティ]は[尊者の近くに]到達した。[そして

彼は] 三界 [に住む生き物たち] によって囲まれ、三十四の優れた特徴を備えた勇者 [マハーヴィーラ] を見た後、疑いを抱きつつ [マハーヴィーラの] 目の前に立った。

iya vottūṇaṃ patto daṭṭhūṃ telokkapaṇivuddaṃ vīraṃ /

cottisāyisayanidhiṃ sasamkito¹ ciṭṭhito purato² //

[Skt.: iti uktvā prāpto draṣṭuṃ trailokyaparivṛtaṃ vīraṃ /

catustrimśadatiśayanidhiṃ saśaṅkitaḥ sthitaḥ purataḥ //]

(1. VĀBh (d, e), ĀN (d): sa samkio; KSDhV: samkio 2. VĀBh (d, e): 'vi ya ṭhio purao)

【解説】

Cf. VĀBhVṛ on VĀBh (d) 2023: 'iya' evaṃ 'vottūṇaṃ'ti mahāpralayamegha iva garjitvā prāptaḥ --- sakalāsuraśurendrasamkulaṃ svargasaṅghātaṃ iva samavasaraṇaṃ praviṣṭaḥ, tatra ca 'drṣṭvā' ālokyā 'trailokyaparivṛtaṃ' trilokanivāsivīṣiṣṭabhavyaprāṇisaṅghātakotākoṭīpariveṣṭitaṃ 'vīraṃ' vardhamānasvāmināṃ, kiṃvīṣiṣṭaṃ ity ata āha --- catustrimśadatiśayasamprāptaṃ 'sasamkio' saśaṅkaḥ samvṛttaskandhavad aśeṣāpaghanayaṣṭivāt /; ĀHV on ĀN (a) 599: sa ca bhagavatsamīpaṃ prāpya bhagavantaṃ ca catustrimśadatiśayasamanvitaṃ tridaśāsuraṇareśvaraparivṛtaṃ drṣṭvā saśaṅkaḥ tadagrataḥ tasthau / (そして彼 (インドラブーティ) は、世尊の近くに到達し、三十四の優れた特徴を備え、神々 (tridaśa) とアスラ (asura) と人間 (nareśvara) に囲まれた世尊を見て、疑惑を抱きつつ、彼の前に立った。) ; ĀMV on ĀN (d) Bhāṣya 124: iti pūrvoktaṃ uktvā prāpto bhagavatsamīpaṃ, drṣṭvā ca bhagavantaṃ vīraṃ trailokyaparivṛtaṃ catustrimśadatiśayanidhiṃ sa śaṅkitaḥ purato 'vasthitaḥ /

VĀBh (d, e) 及び ĀN (d) 刊本では編者は 'sa samkio' と二語に分割している。ただしコーティ・アーチャーラヤ注は 'sasamkio saśaṅkaḥ' と言い換えており、複合語であることを示している。いずれにせよ、意味にはほぼ変化はないであろう。ジナの三十四の優れた特徴については、河崎 [2006] および同論文の参考文献を参照されたい。

0.1.2 インドラブーティとマハーヴィーラの邂逅

【VĀBh 2000(Niryukti Gāthā 442)】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2024 (Niryukti 149); VĀBh (e): 2020 (Niryukti 442); ĀN (a, d, e): 599; ĀN (f): 600; KSDhV: Niryukti 599, p.253)

すると [彼インドラブーティは]、生や老いや死を離れ、一切知者であり一切見者である勝者 [マハーヴィーラ] に、[その] 名前と姓とでもって話しかけられた。

ābhatṭho ya jīṇeṇaṃ jātijarāmarāṇavippamukkeṇaṃ /

nāmeṇa ya gotteṇa ya savvaṇṇū savvadarisīṇaṃ //

[Skt.: ābhāṣitaś ca jīnena jātijarāmarāṇavipramukkena /

nāmnā ca gotreṇa ca sarvajīnena sarvadarśinā //]

【解説】

Cf. VĀBhVṛ on VĀBh (d) 2024: 'ābhāṣitaś ca' āmantritaś ca, kena 'jīnena' śrīmahāvīravardhamānasvāminā, kiṃvīṣiṣṭeṇety āha --- jātiḥ prādurbhūtiḥ jarā --- vayohānikāriṇī marāṇaṃ --- prāṇanibandhachedakāri punar dvandvas tair vipramuktaḥ, tena muktavac ca mukta ity abhiprāyaḥ, katham, nāmnā he indrabhūte gotreṇa he gaumeti, cakārāv anayor bhinnārthābhīdhāyinau, kiṃvīṣiṣṭeṇa ---

sarvajñena sarvadarśinā /; ĀHV on ĀN (a) 599: 'ābhāṣitāś ca' samlaptāś ca, kena --- jñena, kimviśiṣṭena --- jātiḥ prasūtiḥ jarā vayohānilakṣaṇā maraṇaṃ daśavidhaprāṇaviyogarūpam ebhir vipramuktas tena, katham --- nāmnā ca he indrabhūte, gotreṇa ca he gautama, kimviśiṣṭena jñena ity āha --- sarvajñena sarvadarśinā /

本韻文は、11人全てのガナダラについて繰り返される。すなわち、全てのガナダラたちはマハーヴィーラによって、その名と姓を以て話しかけられることになる。

《パラレルテキスト》

KSVV on KS 121, p.340: ityādi cintayann eva sudhāmadhurayā girā / ābhāṣito jinendreṇa nāmagotroktipūrvakam //; KK, p.143: yāvāt tiṣṭhati tāvat sudhāmadhurayā vācā nāmagotrakathanapūrvakam prabhūṇābhāṣitaḥ /

【VĀBh 2001】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2025; VĀBh (e): 2021; ĀN (d): Bhāṣya 125; ĀN (e): Bhāṣya 1; KSDhV: Bhāṣya 125, p.253; KSam: v.49, p.32)

「おおインドラプーティよ。ゴータマよ。ようこそいらっしゃいました。」と勝者 [マハーヴィーラ] に言われて、[彼インドラプーティは] 次のように考えた。「[なんと！] 彼は私の名前まで知っているではないか。いやむしろ [有名な私のことだから] 誰が私を知らないことがあろうか。」と。

he imdabhūti gotama sāgatam utte jñeṇa cinteti /

nāmaṃ pi me vijānati adhavā ko māṇa yānāti //

[Skt.: he indrabhūte gotama svāgatam ukte jñena cintayati /

nāmāpi me vijānāti atha vā ko māṃ na jānāti //]

【解説】

Cf. VĀBhVṛ on VĀBh (d) 2025: punar apy avaṣṭambhaṃ baddhvedam āha --- “atha vā ko māṃ na jānāti”, atiprakāṣo 'ham asmin bhuvane /; ĀHV on ĀN (a) 600: itthaṃ nāmagotrasmalaptasya tasya cintābhavat --- aho nāmāpi me vijānāti, atha vā prasiddho 'ham, ko māṃ na vetti /; ĀMV on ĀN (d) Bhāṣya 125: sa cintayati --- aho nāmāpi me vijānāti, atha vā sarvatra prasiddho 'ham ko māṃ na jānāti /.

一切知者であるマハーヴィーラにその姓名を言い当てられ、インドラプーティは動揺しつつも自己の慢心により、都合のよい納得をする。自身の名声があらゆる人々に広まっているので、マハーヴィーラが名前を知っていても当然とするのである。

《パラレルテキスト》

KSVV on KS 121, pp.340-341: he gautamendrabhūte tvam sukhenāgatavān asi / ity ukte 'cintayad vetti nāmāpi kim asau mama // jagattritayavikhyātaṃ ko vā nāma na vetti māṃ / janasy-ābālagopālaṃ pracchannaḥ kim divākaraḥ // (「おおガウタマ、インドラプーティよ。よくいらっしゃいました。」と言われて、[インドラプーティは] 次のように考えた。「どうして彼は私の名前まで知っているのか？いや、人間のうちで子どもや牛飼いに至るまで、三界によく知られた私の名を、誰が知らないことがあろうか。太陽が [闇に] 覆われてしまうことがあろうか。」) ; KK, p.143: he indrabhūte, gautama, tvam sukhenāgataḥ, ity ukte cintayati --- mama nāmāpi jānāti, atha vā ja-

gattrayavikhyāto 'haṃ, ko mām na jānāti /; TŚPC 10.5.74-75: bho gautamendrabhūte kiṃ tava svā-
 gatam ity atha / sudhāmadhurayā vācā taṃ babhāṣe jagadguruḥ // gautamo 'cintayan me 'sau
 gotraṃ nāma ca veti kiṃ / jagatprasiddham athavā ko jānāti na mām iha //; MVC vv.9-10, f.254 a:
 etthamtarāmmi bhuvanēkkabhāṇuṇā jīnavareṇa saṃlatto / bho iṃdabhūi goyama sāgayamii ma-
 huravāṇie // tāhe cīmtiyamimiṇā nāmāṃpi hu me viyāṇae eso / bhuvanē 'vi pāyaḍajasam ahavā ko
 mam na yāṇei //

【VĀBh 2002】

(VĀBh (b, c): none; VĀBh (d): 2026; VĀBh (e): 2022; ĀN (d): Bhāṣya 126; ĀN (e): Bhāṣya 2; KSDhV:
 Bhāṣya 126, p.253; KSam: v.51, p.32; MVC: v.11, f.254 a)

〔彼インドラブーティは〕「もし私の心中にある疑問を理解できるなら、あるいは〔理解で
 きずともその疑問を〕取り払えるならば、その時は私も驚くだろう。」と考えていると、さ
 らに〔マハーヴィーラに次のように〕言われた。

jati vā hitayagataṃ¹ me saṃsayam unṇeja² adhava chimdeja /

to hojja vimhaya me iya cintemto puṇo bhaṇito //

[Skt.: yadi vā hr̥dayagataṃ me saṃsayam unnayed atha vā chindyāt /

tato bhaved vismayo mameṭi cintayan punar bhaṇitaḥ //]

(1. MVC: hiyayagoyaraṃ 2. ĀN (a, d, e), KSDhV: saṃsaya manñija; MVC: saṃsaya maññeja)

【解説】

Cf. VĀBhVṛ on VĀBh (d) 2026: yadi ca hr̥dayagatatvād atūndriyaṃ 'me' mama 'saṃsayam' sande-
 haṃ 'unnayet' jāniyāt, tathājñātam¹ api yadi ca 'chindita' chindyāt tato bhaved visamayo, nānaythā /
 (1. VĀBhVṛ (b): tathā jñātam); ĀMV on ĀN (d) Bhāṣya 126: yadi me hr̥dgataṃ saṃsayam manyeta ---
 - jāniyāt, atha vā chindyāt --- apanayet, tato me vismayo bhavet --- bhaviṣyati iti cintayan punar api
 bhagavatā bhaṇitaḥ //

心中にある疑問を理解すること、またはその疑問を晴らすこと、という二点のいずれかをもって、
 インドラブーティはマハーヴィーラは一切知者性を認めようとする。この後（次詩節（VĀBh
 2003）以降）、マハーヴィーラは彼の疑問を看破し、さらにその疑問を完全に取り除くこととなる。
 すなわち、ジーヴァの存在に関する議論を展開するのである。

《パラレルテキスト》

KSVV on KS 121, p.341: prakāśayati guptaṃ cet sandehaṃ me manaḥsthitam / tadā janāmi sarva-
 jñam anyathā tu na kiñcana //; KK, p.143: yadi mama manaḥsandehaṃ kathayati tadāmuṃ sarva-
 jñam jānāmīti cintayantaṃ punaḥ prabhuḥ proce /; TŚPC 10.5.76: saṃsayam hr̥dayastham me
 bhāṣate ca chinatti ca / yady asau jñānasampattyā tadāścaryakaraḥ khalu //

略号表（追加分）

【テキスト】

KK: *Kalpakaumudī* (Śāntisāgara): Ānandasāgara (ed.), *Yugaḥpradhānaśrutakevali-Bhagavacchri-
 Bhadrabāhusvāmi-sūtritam* *Śrīmattapogacchasaudhānuḥpamānūnastambhāyamāna-
 mahāmahopādhyāya-Śrī-Dharmasāgaracaranareṇu-Mahopādhyāya-Śrī-Śrutasāgaracaranakamalo-*

- pāsakamahopādhyāya-Śrī-Śāntisāgara-kalpita-Kalpakaumudyākhyā-Vivaraṇasamvalitam Śrī Kalpasūtram*. Ratlam: Rṣabhadevaji Keśarīmalaji Śvetāmbara Saṃsthā, 1936.
- KS : *Kalpasūtra* (Bhadrabāhu):
- (a): Ānandasāgara Gaṇi (ed.), *Upādhyāyaśrīmad-Vinayavijayagaṇi-viracitā Kalpasūtravṛttiḥ Subodhikābhidhānā*. Devacandra Lālbhāi Jainapustakoddhāra Granthānka 7, Bombay: Devacandra Lālbhāi Jain Pustakoddhāra Fund, 1911.
- (b): Muni Vallabhavijaya (ed.), *Upādhyāyaśrīmad-Vinayavijayagaṇi-viracitā Subodhikābhidhāyā Vṛtṭyā Samalānkr̥tam Śrī Kalpasūtram*. Ātmānanda Jaina Granthamālā No.31, Bhavnagar: Śrī Jaina Ātmānanda Sabhā, 1915.
- (c): *Śrutakevalīśrī-Bhadrabāhupranītam Śrī Kalpasūtram (Daśāśrutaskandhāṣṭamādhyayanam) Lokaprakāśa-Nayakarnīkādigraṇthasaudhasūtradhāra-Śrī-Vinayavijayopādhyāya-viracitām Śrī Kalpasūtram*. Ratlam: Rṣabhadevaji Keśarīmalaji Śvetāmbara Saṃsthā, 1939.
- (d): Śrī Sūryodayasāgara Sūri, Lābhasāgara, and Śrī Kaṃcanasāgara Sūri (eds.), *Śrutakevalī-Śrī-Bhadrabāhusvāmi-pranītam Mahāmahopādhyāya Śrī-Dharmasāgaragaṇi-viracitām Kiraṇāvalī-vṛtṭyā samalānkr̥tam Śrī Kalpasūtram*. Śrī Āgamoddhāraka Granthamālā, Mānikya 4, Surat: Devacandra Lālbhāi Jain Pustakoddhāra Fund, Vik. Saṃ. 2046.
- KSam : *Kalpasamarthana* (Pūrvācārya, anonymous): Ānandasāgara (ed.), *Pūrvatanācāryapranītam Śrī Kalpasamarthanam*. Ratlam: Rṣabhadevaji Keśarīmalaji Śvetāmbara Saṃsthā, Vik. Saṃ. 1994.
- KSDhV : *Kalpasūtravṛtti* (Dharmasāgara Gaṇi): See KS (d).
- KSVV : *Kalpasūtravṛtti* (Vinayavijaya): See KS (a, b, c).
- MVC : *Mahāvīracaritra* (Guṇacandra): Ānandasāgara (ed.), *Cāndrakulīna-Śrīmad-Abhayadevasūri-siṣya-Śrī-Prasannacandrācāryokṭyā Śrī-Sumativācakaśiṣyaiḥ Śrī-Guṇacandragaṇibhir vihitam Śrī Mahāvīracaritam*. Devacandra Lālbhāi Jainapustakoddhāra Granthānka 75, Bombay: Devacandra Lālbhāi Jain Pustakoddhāra Fund, 1929.
- SthA : *Sthānāṅga*: Muni Jambūvijaya (ed.), *Śrī Sthānāṅgasūtram*. 3 Vols., Jaina Āgama Series No. 19 (1, 2, 3), Mumbai: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 2002-2003.
- SthAV : *Sthānāṅgavṛtti* (Abhayadeva): See SthA.
- TAASBh : *Tattvārthāgadhigamasūtrabhāṣya* (Umāsvāti): See TAAS.
- TŚPC : *Triṣaṣṭhiśalākāpuruṣacarita* (Hemacandra):
- (a): *Kalikālasarvajña-Ācāryasiromaṇi-Śrīmad-Hemacandrasūriśvara-viracitām Triṣaṣṭhiśalākā-puruṣacaritam Mahākāvyaṃ: Daśamaṃ Parva*. Mumbai: Śrīmatī Gaṃgābāi Jaina Charitable Trust, 1977.
- (b): Vijayaśīlacandrasūri (ed.), *Kalikālasarvajña Śrī-Hemacandrācārya-viracitām Triṣaṣṭhiśalākā-puruṣacaritamahākāvyaṃ (Daśamaṃ Parva)*. Ahmedabad: Kalikālasarvajña Śrīhemacandrā-cārya Navama Janmaśatābdi Smṛti Śikṣaṇa Saṃskāranidhi, 2012.

【参考文献】

Bollée, Willem

2016 “Hemacandra’s Life of Mahāvīra (Triṣaṣṭhiśalākāpuruṣacaritra X): Analysed in Keywords from Helen Johnson’s Translation VI.” *Studien zur Indologie und Südasiestudien*, 32/33: 41-165.

Dundas, Paul

- 2007 *History, Scripture and Controversy in a Medieval Jain Sect*. Oxford: Routledge.
- Kawasaki, Yutaka (河崎豊)
- 2006 「マハーヴィーラの肉体—ジナ身観の研究(1)—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』46: 37-63.
- Sanghavi, Sukhlal
- 1974 *Pt.Sukhlalji's Commentary on Tattvārthasūtra of Vācaka Umāsvāti*. Translated by K. K. Dixit, L. D. Series No.44, Ahmedabad: L. D. Institute of Indology.
- Uno, Tomoyuki (宇野智行)
- 2004 「ジナバドラのジーヴァ存在論証：ガナドラヴァーダ第一章和訳研究(1)」『ジャイナ教研究』10: 25-50.
- 2011 「ジャイナアーガマ覚え書～聖典と知の関連～」『人間文化研究所年報』22: 1-15.
- Velankar, Damodar Hari
- 1944 *Jinaratnakośa: An Alphabetical Register of Jain Works and Authors*. Vol.I Works, Government Oriental Series Class C, No.4, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Wiles, Royce
- 1997 *The "Śvetāmbara Canon": A Descriptive Listing of Text Editions, Commentaries, Studies and Indexes*. Canberra.
- Wiley, Kristi L.
- 2004 *Historical Dictionary of Jainism*. Historical Dictionaries of Religions, Philosophies, and Movements, No.53, Lanham, Toronto, Oxford: The Scarecrow Press, Inc.

*本稿は、平成28年度科学研究費補助金・基盤研究(C)による研究成果の一部である。

[注]

- ¹ Velankar [1944: 306]によれば、グナチャンドラはスマティ・ヴァーチャカ (Sumati Vācaka) の弟子であり、ヴィクラマ暦1139年に『マハーヴィーラ・チャリトラ』を造った。またグナチャンドラは、ジナチャンドラ・スーリの弟子であるブラサンナチャンドラ・スーリの要請によって、この作品を造ったとされる。
- ² Velankar [1944: 76], Wiles [1997: 199]によれば、ダルマサーガラ・ガニはタパーガッチャ (Tapāgaccha) に所属し、Vikrama Saṃvat 1628年 (1571ca.) に『キラナーヴァリー』を造ったとされる。KSDhV刊本の編者による序文は、Vikrama Saṃvat 1696年 (1639 ca.) に造られたヴィナヤヴィジャヤ著『スボーディカー』(Subodhikā: KSVV)には、“viśeṣārthinā kalpakiraṇāvālyādayo vilokyāḥ”と述べられており、ヴィナヤヴィジャヤがダルマサーガラ注を参照していたことを指摘している。Dundas [2007: 31-32]によれば、ダルマサーガラは1538年に師ヴィジャヤダーナ・スーリの元で出家し、1562年にウパーディヤーヤの地位を襲い、1596年に逝去している。タパーガッチャそのものについても、Dundas [2007]を参照されたい。
- ³ 『カルパ・サマルタナ』については、Velankar, Wiles共に全く言及しない。KSaM刊本の編者アーナンダサーガラは、その序文において『カルパ・サマルタナ』の著者は特定できないが、タパーガッチャ所属であり、さらにこの作品がVikrama Saṃvat 13世紀から17世紀に造られたと述べている。

(うの ともゆき：日本語・日本文学科 教授)